

☆☆ 母しをりの百年 ☆☆

☆ Centenarian Shiwori ☆

作品と解説

しずまれい

SHIZUMA Rei

2024

## 参考文献

私もまた語り部として生きる(注)

村上義雄編著 教育史料出版会

私の故郷は地球なのです(注)

村上義雄編著 教育史料出版会

静間良次遺文と追想(非売品)

(注)

母が、カルチャーセンターで、自分史をテーマにした文章教室を受講した際に、講師が受講者達の作品を纏めて編集した本

# 1. 仙台(青葉城下)で誕生



# 1. 仙台(青葉城下)で誕生

母は、1924年(大正13年)8月に仙台で次女として生まれる。祖父が旧大蔵省の官僚であったため、所謂“若殿研修”で、最初の赴任地であった。母の名前の『しをり』は、当時としては珍しい名前であろう。今でも、漢字や『しおり』はたまに見かけるようになったが、『を』を使ったものは未だに目にしたことがない。母によると、『しをり』は『枝折』に由来し、山で後から来る人のための目印という意味だそう。母は4人兄弟姉妹であるが、母に突出して変わった名前をつけたのは何故なのか、祖父母に確認するのを忘れた。漢字だと悲惨だが、ひらがなだと女性らしく、『を』にすると語感が更に良いように思う。

## 2. 芦屋川



## 2. 芦屋川

祖父が、仙台税務署から大阪西税務署に配属され、家族は芦屋市に住んだようだ。母の話では、多分芦屋川と思われる川で遊んだ記憶があり、その時一緒に遊んだ子は、執事らしき人物がずっと見守っていたそうである。いかにも芦屋ならありそうな話ではある。これからは、想像の世界であるが、父はこの時期に、芦屋市の隣りの神戸市東灘区に住んでいたのも、ひょっとすると遭遇していたのではないかと思いたい。実際は、父は御影で、母は芦屋のどこか住所不明で、仮に同じ阪急線沿線でも、子供にはちょっと遠い距離ではある。しかし、小説の世界なら、出会ってないと面白くない。絵の世界も同じ。



### 3. 広島女学院付属幼稚園



### 3. 広島女学院付属幼稚園

祖父が、大阪から広島に配属され、家族は役所に割と近いところに住んだようで、祖父は歩いて通勤していたようだ。その家の近くに広島女学院の付属幼稚園があったので、母はそこに通った。キリスト教系の幼稚園で、当時としてはユニークな指導をしていたようである。母は、学校生活の話と言えば、広島のことしか話さない。具体的な内容は殆どないのだが、余程楽しい体験を沢山したものと思われる。でも、一番楽しい体験は、祖父と毎日一緒に通園したことのようなのだ。住んでいた場所がわからず、どういう道順で祖父が、家～幼稚園～役所へ歩いたのかはわからない。母のおぼろげな記憶によると、広っぱがあって、お城の石垣のようなものがあるところを歩いて行ったそうである。



## 4. 日本舞蹈



## 4. 日本舞踊

仙台以後1～2年間隔で、大阪、広島、名古屋と渡り歩き、東京に戻り、家族は現在の新宿区戸山町に落ち着く。母は、ここで、終戦直前の1945年5月25日の山の手大空襲により自宅家屋が焼失する直前まで過ごす。母は、東京市市谷尋常小学校に編入学する。祖母の勧めで、いろいろな習い事をしたようであるが、母はどれも長く続かなかったようである。日本舞踊もその一つであるが、本人は、やったことは覚えているものの、具体的な思い出話は出てこない。

## 5. 鎌倉 海水浴



## 5. 鎌倉 海水浴

母の家族は、母が小学校の時から女学校の2年ぐらいまで、毎年夏になると、鎌倉の貸別荘に行き、海水浴を楽しんだ。子供等はずっと行きっぱなしで、親たちは週末に合流していたようである。母は体操が苦手だったが、水泳だけは好きだったようで、女学校での遠泳は、当然完泳グループだった、とのこと。母は、小学校の頃は、波に揉まれてぐるぐる回転するのが好きだったそうだ。ちょっと意外な感じ。4月の身体検査の時に、前年の水着の跡が残っていたと言うから、筋金入りの夏っ子である。昨今紫外線の有害性が指摘されているが、母には生きるエネルギーとなったようだ。



## 6. 小笠原流礼法授業

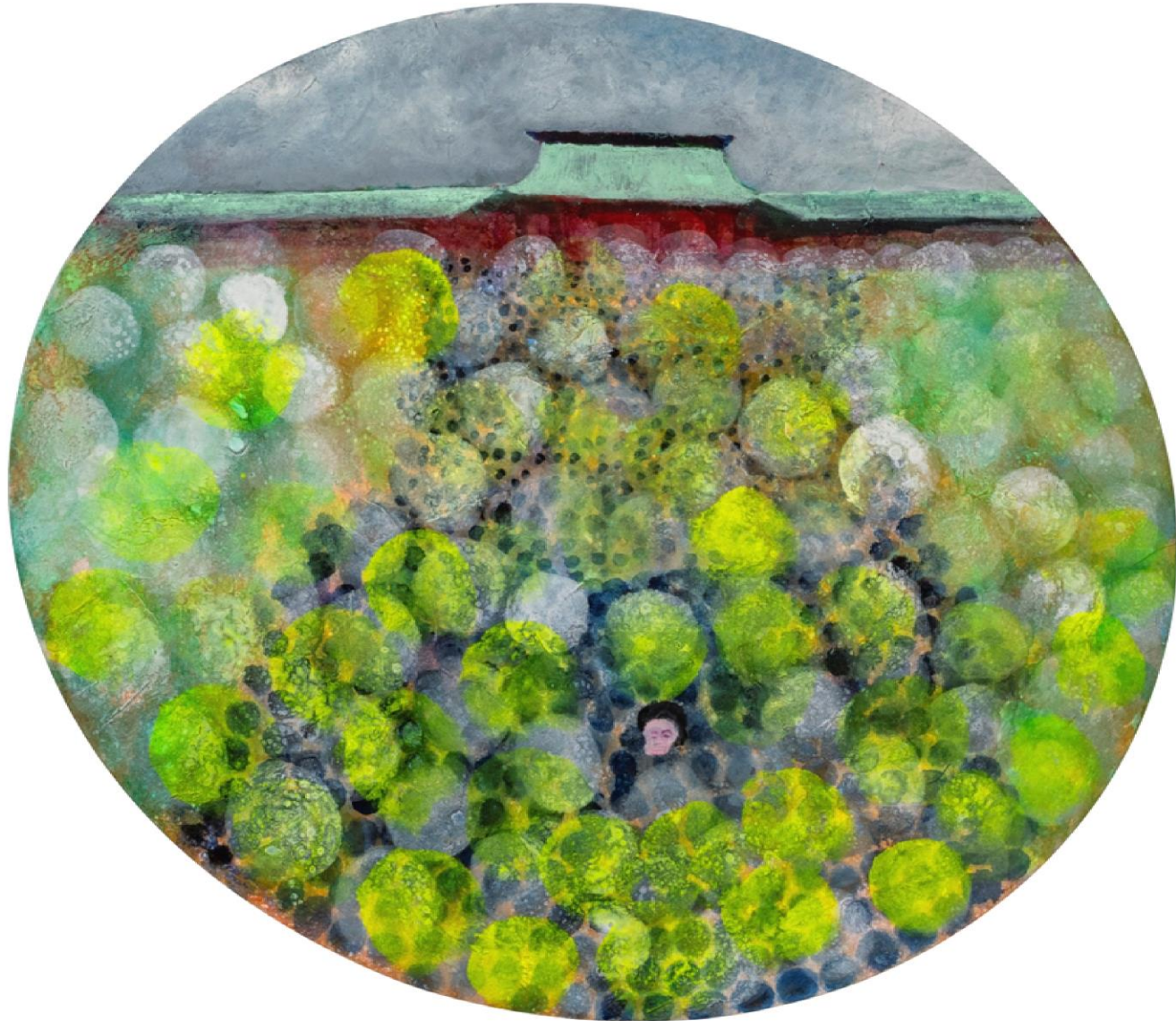


## 6. 小笠原流礼法授業

母は、今の新宿区歌舞伎町にあった東京府立第五高等女学校に入学する。そこでは、授業に小笠原流礼法が取り入れられていた。母は、特に得意と言う訳では無かったが、後に茶道を習っている時に、先生から、第五の方々は鍛えられているから歩き方が素晴らしい、と褒められたそう。第五は質実剛健な校風らしく、母には向いていなかったようだ。第五での楽しい思い出話は聞いたことがない。それでも、結婚してから、名古屋で20数年過ごした後、東京に戻ってからは、第五の19回卒の同窓会には毎年参加していた。しかし、91歳頃の同窓会で、当時かなり気分屋になっていた母が、当日朝にドタキャンして、参加者が10名を割ったところで同窓会は終了となった。



# 7. 明治神宮 戰勝祈願

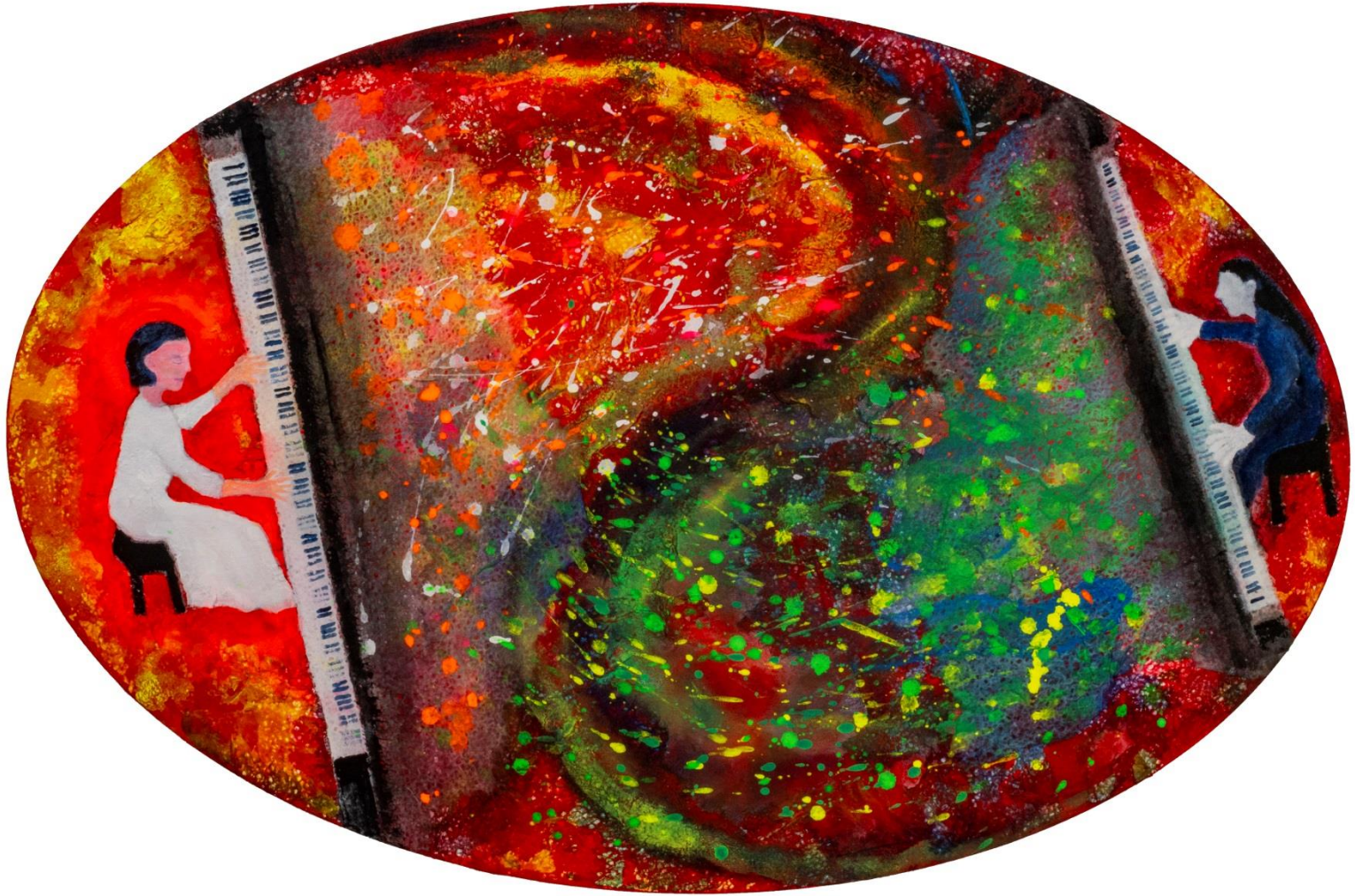


## 7. 明治神宮 戦勝祈願

母が女学校時代の後半に、太平洋戦争が始まり、学校から皆で歩いて、明治神宮へ戦勝祈願に行ったそう。砂利道の参道なので、他にも大勢の戦勝祈願者たちが歩いていると、砂埃がもうもうと立ち上り、前が見えなくなるほどだったと言う。



## 8. 幻のピアノ発表会



## 8. 幻のピアノ発表会

母が習い事の中で唯一真剣に取り組んだのが、ピアノであった。伯母が始めたピアノを見聞きしたのが切っ掛けだった。近くに住む芸大出の若い女流ピアニストに鍛えられ、芸大を目指したいと思ったこともあったらしいが、祖父母の賛同は得られそうにないし、戦時下の社会情勢を考えると、諦めざるを得なかったようである。そんな中、おさらい会を実施することになり、母は、先生と連弾でベートーベンの『皇帝』を演奏する予定だったが、戦況が悪化し、おさらい会はお流れとなり、演奏は幻に終わった。それにしても、あのピアノ協奏曲が連弾で演奏できるのか、そもそも楽譜があるのか、ヤマハで探してみたら、ナント！あった。



# 9. 甲州街道で軍用トラックをヒッチハイキング



## 9. 甲州街道で軍用トラックをヒッチハイキング

昭和20年終戦直前の5月25日、東京山の手空襲で戸山町の母の家は焼失した。しかし、母は、祖父が用意した経堂の家に、下の叔父と疎開していて難を逃れた。伯母は既に結婚して代田にいて無事、上の叔父は川崎で軍事訓練に参加していたため無事、祖父母のみが焼夷弾の危険に曝されたが、何とか生き延びた。母は、経堂で新宿方面が赤くなっているのを見ていたので、翌日電話するも、繋がらないので、一人で歩いて新宿方面に向かった。途中で、文京区の娘の安否を確認しに行くというオジさんと一緒に甲州街道に出ると、軍のトラックを待っている人達がいたので合流する。やがてトラックが来て、母は、皆に引っ張られて、お尻を押されて、やっとのことで荷台に乗り込んだ。だが、一面焼け野原で、どこで降りたら良いのか分からず、迷っていたが、伊勢丹と三越だけが原形を留めていたので、新宿に来たことが分かり、そこを通過した、恐らく曙橋辺りで降りた。東京女子医大の建物が見えたところ辺りで、土地勘も戻ってきて、漸く戸山町の焼失した自宅に辿りつき、庭に居所を書いた看板が立っていて、無事祖父母と再会することができた。母は、もし自分が一緒にいたら、勤め先の早稲田大学音教振動研究所の傍にあった防空壕に逃げ込み、焼死していたかもしれない、と言う。そこに逃げ込んだ多くの人々が亡くなっており、毎年5月25日に、喜久井町観音慰霊祭が行われている。祖父母は、その存在を知らなかったのが幸いした。母は、大事なベーゼンドルファー製(多分?)のピアノや人生で最初で最後のボーナスで買ったベートーベンの第九のSPレコードを失った。



# 10. 東京大神宮で結婚式



## 10. 東京大神宮で結婚式

母は、戦後すぐに、祖母の友達の紹介で、見合い結婚をした。お相手は、友達のご主人が役員として勤めている会社の社長の姉の息子で、名古屋大学理学部数学科助教授。息子といっても、養子である。父方の祖母は、早くに夫を亡くし、子供がいなかったもので、姉の5人兄妹の中で、長男以外一番無難そうな次男の父を養子に迎えたそうだった。母は、最初に父を見た時に、内股でなよなよと歩くので、やや不安だったそうだった。そこで簡単に断れないのが昔のお見合いである。しかし、結果はオーライだった……かな？



# 11. 名古屋近辺を6年で4回も転居



## 11. 名古屋近辺を6年で4回も転居

母は、結婚して、名古屋で父と父方の祖母の3人で暮らし始めた。しかし、戦後の住宅不足で、間借りしても、引揚で家族が戻ってくると、また、別の間借りへと、本山から、岩倉、津島の遊郭街と転居し、更に津島神社近くの間借り先に転居したところで、母方の祖父が訪ねてきて、そのあまりの惨状にビックリして、住宅金融公庫を紹介し、住宅の購入を促した。祖母がフランスにいた時に購入したモーリス・ドニの絵を売って頭金とし、千種区向陽町に家を建てたそうだ。こんな話は、ず～と後に父が亡くなってから母から聞いた話であるが、父が如何に世渡りが下手で、世事に疎いかを物語っている。母は、現状肯定型で、戦後のドサクサの新婚家庭はこんなものとして、素直に受け入れて対処していたと思われる。しかし、父方の祖母は、新宿の広い家を甥に貸して、父母と一緒に名古屋の狭い借り家を転々とさせられて、さぞストレスが溜まったことだろう。

## 12. 伊勢湾台風



## 12. 伊勢湾台風

1959年(昭和34年)9月26日に伊勢湾台風が名古屋を襲って、大災害をもたらしたが、我が家も大変だった。私が覚えている限りでは、一番活躍したのは祖母で、雨戸を釘で留めたり、雨戸同士をカスガイで留めたり、果ては、ベッドを横倒しにして、窓が壊れ、風が侵入するのを防いだ。母は祖母に従い、一緒に作業した。兄は何をしていたか思い出せないので、多分自分の部屋で勉強していたと思われる。父はたとえば、天井からの雨漏りがあちこちから発生したのを見て、雨漏りの場所に画鋏で糸を留め、糸のもう一方の端を洗面器に留めて、数か所の雨漏りを1ヵ所に対応することに成功し、一人悦に入っていた。私は、何かしたという記憶はなく、多分、こういうことを見ていただけだと思われる。今思うと、それぞれの行動が、その人をよく表していて面白い。



# 13. モード エ モード (Mode et Mode)



## 13. モード エ モード (Mode et Mode)

母は、女学校を卒業後、東京YWCAが運営している駿河台女学園と言う2年制の専門学校に2年に編入し、1年間で卒業している。祖母がキリスト教系の学校に進ませるといのは考えにくいだが、多分、戦時下で、縁談を勧める状況ではないので、緊急避難的に学校に通わせたのだろう。母は、もう一つ伯母が通っていたトウ洋裁研究所にも通った。このあたりの年代的前後はよく解らず、まさに戦中戦後のドサクサである。しかし、東京でこの2つの学校に通ったことが、母が見ず知らずの名古屋で生活するのに大いに役立った。というのは、名古屋に、YWCAもトウ洋裁研究所も支所があったのだ。母はこの2つの場所で、スムーズに名古屋に馴染んでいったようだ。特に洋裁には熱心で、小さい家の一角に、洋裁の要塞を築いてせっせと服を作っていた。伊藤茂平氏の立体裁断という手法がトウの特徴らしく、自分の体形の立体模型を作ってもらっていた。Mode et Modeというのは、トウ洋裁研究所の月刊誌の名前である。

# 14. ベーベルの婦人論



## 14. ベーベルの婦人論

母は、戦後すぐに結婚し、専業主婦になったが、当時そういう女性は多数いたと思われる。彼女らは、戦後の自由を、新鮮な驚きと感動をもって享受したと思われる。特に本が彼女らの知識欲を満たしたと思われる。母は、戦時中で、当然自由に本は読めなかった。しかし、父がいろいろな本を母に紹介し、母は勧められるがままに、素直に読んだようである。ロマン・ロランやトルストイはまだわかるが、まさかのドイツ人社会主義者ベーベルの『婦人論』には、さすがに驚いた。勧める父にもビックリだが、それを真面目に読んで、開眼した母には、更にビックリである。しかも、それが電車を待っている時と言うのであるが、それは出来すぎていて、おそらく、文章教室の先生の入知恵だと思われる。でも絵にはピッタリ。



# 15. 麻雀 タバコの煙



## 15. 麻雀 タバコの煙

正月になると、我が家には、父の生徒さん達がやってきて、昼間は、囲碁、将棋、夜の宴会後は、麻雀となる。祖母と母は大忙しとなる。祖母は食事の用意を手伝って退散するが、母は、宴会、麻雀まで参加する。当時まだ大学院生だった故京大教授に、家庭麻雀程度の母が偉そうにポンチー麻雀を教えるのだから、皆真っ青である。その際、タバコの煙が半端ではない。まさにアヘン屈である。天井の低い六畳ぐらいの部屋に10人以上が宴会と麻雀をし、その間、母以外は全員がタバコを吸っている状況は、今では到底考えられない光景である。これだけ受動喫煙をしても、母が生き延びているのは???



# 16. 屠所に引かれる牛の如く



## 16. 屠所に引かれる牛の如く

母は、どこからか社交ダンスを紹介され、習い始めたところ、これは、父の姿勢や歩き方の改善に効果があるのではないかと思い、気の進まない父を連れて、ダンスの先生を訪ねた。父と先生は神戸育ちということで意気投合し、2人でダンスを習う。父は技術よりも理論に興味を持ち、外国の理論書を読み漁り、技術では母に劣るも、理論では遙か先を行った。母が父の人生に最も貢献した行動だと思っている。タイトルの言葉は、実際に父が母に言った言葉だそう。

# 17. 庭で女子大生とアフタヌーンティー



## 17. 庭で女子大生とアフタヌーンティー

母が父にダンスを勧めたおかげで、父は姿勢、歩き方とも見違えるほど改善したそうだ。父が東京女子大に勤める気になったのには、この外見の改善による自信が大きいと思われる。父は、よくゼミの生徒さん達を自宅に呼び、庭でランチやアフタヌーンティーを楽しんだ。当然、母が、皆さんをもてなした。これがご縁で、母は、父が亡くなった後にも、皆さんの多くの方々と親しくして頂き、まさに父の貴重な無形遺産だと思っている。この遺産が母の長寿に貢献したことは間違いない。



# 18. リュー・ド・ラ・ポンプ (Rue de la Pompe)



## 18. リュー・ド・ラ・ポンプ (Rue de la Pompe)

母は、父方の叔父夫妻がザルツブルグ音楽祭を鑑賞するツアーに行けなくなったということで、叔父夫妻に代り、急遽、父と初めての海外旅行に行くことになった。私も20歳を越えていたので、2人に何かあっても、生きていけるということで、以後せっせと海外旅行を楽しむようになった。母は音楽祭の夜のコンサートに着ていく服として、父方の祖母が仏国滞在中に購入したジャンヌ・パキャンのコートを持って行った。そんなの時代遅れかと思ったが、母の方が服装には詳しそうなので、何も言わず。パッケージツアーのお決まりのコースとして、パリの滞在が含まれていたもので、母たちは、祖父母がパリで生活していたアパルトマンを訪ねた。父が祖父の名刺を持っていたのだ。凱旋門近くのリュー・ド・ラ・ポンプという細長い通り沿いにある。私が10数年前に訪ねた時もまだ無事存在していた。

# 19. ダンシング クイーン (Dancing Queen) ! ?



## 19. ダンシング クイーン (Dancing Queen) ! ?

母は、名古屋から東京にもどってからも、ダンスに打ち込んだ。父は適当につきあっていたようだ。家の中で2人で踊っているところを見たことがある。ある時ダンス教室のパーティがあり、母は、デモンストレーションに出るように勧められ、出ることになった。父はシャイであるし、自分のレベルも分かっているので出ず。しかし、絵としては父にも控えめに参加してもらった。



## 20. フォーレのレクイエム



## 20. フォーレのレクイエム

母は、父から、自分が亡くなった時には、無宗教で、フォーレのレクイエムを流してほしい、と頼まれたそうだ。父から生前に、この曲を聞いてみて、と言われて聞いた時には、他に仕事があるからと、ちょっと聞いただけだったそうだ。しかし、母は、父が亡くなって一段落してから、1か月くらいは、フォーレのレクイエムを何度も何度も聞き、もう十分聞いたというところで、ピタッと聞くのを止めたと言う。へえ〜、そういうものかと、私には新鮮な驚きだった。

## 21. 東京ディズニーランド(Tokyo Disneyland)



## 21. 東京ディズニーランド (Tokyo Disneyland)

母は、父が亡くなって1年後ぐらいに亡くなった、甲南中学時代の親友の奥様と、それまで殆ど交流が無かったのに、急に交流が始まり、2人で国内旅行に出かけるようになった。ずっと後になって、母から、2人で東京ディズニーランドに行ったことがあることを聞いた。お婆さん二人で何をしに行ったのやら。母は、その後も頻繁に海外旅行ツアーに一人で参加し、他に一人で参加していた女性と意気投合し、都合が合えば一緒に行くこともあったようだ。最後の海外旅行は、77歳喜寿の時に、名古屋のYWCAで知り合った同世代の友人と2人での、ニュージーランドのツアーだった。



## 22. ノルディックポールで散歩



## 22. ノルディックポールで散歩

母は、コロナが流行する前までは、ノルディックポールを杖代わりにして、結構歩いていた。ノルディックポールで散歩すると、丁度いい距離にお寿司屋さんがあり、散歩のモチベーションになっていた。丁度コロナが流行りだした頃に腰痛を再発し、入院したが、腰痛はすぐ治ったのに、足が動かなくなってしまった。慌てて退院させ、自宅でリハビリをし、何とか、歩行器で歩けるまでになった。

## 23. トゥール ダルジャン (La Tour d'Argent)



## 23. トゥール ダルジャン (La Tour d'Argent)

私は、母が父と最初にパリに行った時、父とトゥールダルジャンに行ったかどうか確認していなかったが、最近、東京女子大の卒業生の方から、そこへ行ったという話を聞いた。しかも、彼女は、父から食べた鴨の番号まで聞いた、と言うのだ。父は、祖父母がこのレストランに行ったことを知っていて、母を連れて行ったと思われる。それにしても、祖父母や父母の鴨番号については、見たことも聞いたこともない。百歳の祝いに、本店へ行くのはもはや無理なので、東京支店へ家族で行った。果たして母は、鴨を食べて当時を思い出してくれたであろうか？

ちなみに、母が食べた鴨の番号は、No. 293911 でした。